

親木と若木

小川未明

青空文庫

なんでも、一本の木が大きくなると、その根のところに、小さな芽が生えるものであります。

孝ちやんの家の垣根のところに、山吹がしげっていました。ふさふさとして、枝はたわんで黄金色の花をつけていました。日の光は、広々とした庭の面にあふれていましたから、この花の上をも照らしたのであります。花には、みつばちがたかり、暖かな風が、おだやかに接吻していました。

この山吹の根もとには、新しい芽が、幾本も土を破って頭を出していました。そして、自分たちの頭におおいかかっている、幾つかの枝のすきまから、かすかにもれてくる日の光を受けて、早く、大きく伸びて、枝と枝の間を分けて、自分たちも広い世界に出ようとしたのであります。

山吹は、子孫のしげることを誇りとしていました。もつと、もつと株が大きくなって、みんな、輝く黄金色の花をつけたら、どんなにみごとにしようと思おうと、自から、その日の有り様を空想して、うつとりとせずにはいられませんでした。

けれど、たくさんに頭を出した子孫が、みんな幸福であらうはずがなかったのです。

ひろやかな庭のひなたの方に芽を出したものは、自由に伸びることはできたけれども、はんた反
対に、垣根を越して、北の寒い、日蔭に、不幸にも頭を出したものは、どんな憂きめを
見みたことでしょうか。

ちようど、そこには、竹の棒や、朽ちかかった杭のようなものや、割れた煉瓦などが積
み重ねられてあつて、せつかく、芽を出したけれど、柔らかな頭を、それらの無情な物
体にくじかれて、曲がりくねつて、わずかに、艶気のない青葉をつけているにすぎませ
んでした。そして、おそらく、そこに、こうした、不幸な山吹の苗が、存在している
ということは、みつばちをはじめ、毎日、そこらへきて、口やかましくおしやべりをす
るすずめたちにも、気がつかなければ、また口の端にも上ることはなかったのです。

ある日、勇二は、孝ちゃんの家へ遊びにきて、庭へ出て山吹の花をながめながら、垣
根の外へまわると、ふとそこに、不幸な苗が、みんなから離れて、生えていることに気が
ついたのです。

勇二は、なんとなく、その山吹の苗をかわいそうに思いました。もし、このままにし
ておいたら、ついには伸びもせず、枯れてしまうだろうと思ひました。

「孝ちゃん、僕に、この山吹の芽を一本おくれよ。」と、勇二は頼んだのであります。

「ああ、たくさん殖えて困るのだから、君の好きなのを一本こいで、持ってゆきたまえ。」と、孝ちゃんはいいました。

「いいえ、僕は、この垣根の外にある、やせて、かわいそうな、これでいいのだ。」

「なぜ、そんな元気ののないのを持っていくんだい。枯れるかもしれないよ。」

「だいじょうぶだよ。」

「なかなか、花が咲かないぜ。」

「来年になったら、咲くかもしれない。」

勇二は、孝ちゃんが、不思議がるのを、自分は、かわいそうに思うところから、ていねいに、なるだけ根をたくさんつけるようにこいで、それを持って帰ると、自分の家の庭に植えたのであります。

「お母さん、山吹をもらってきて植えましたが、花が咲くでしょうか。」と、勇二は、お母さんにきいたのであります。

お母さんは、勇二が、庭に植えた、山吹のところへ出て、見られました。

「まあ、この木は、日蔭に生えていたのだね、丹精しておやり。そうすれば、ここは、日もよく当たるから大きくなつて、花が咲かないともかぎらないから。」といわれたので

す。

勇二は、水をやったり、また、犬や、ねこが踏まないように、棒を立ててやったりしました。しかし、芽を出したときから、自然にいじめられてきた山吹は、ちようど、人間でいえば不具者のように、なかなか伸びもしなければ、大きくもなりませんでした。

あの、一年じゆうたつても、日の当たらないところにいたことを考えれば、いまの山吹の身の上は、どれほどかしあわせには相違なかつたけれど、やはり、長い月日の間には、いろいろなつらいこともあれば、思いがけない不幸なめにも出あつたのです。ある日、犬がやってきて、哀れな山吹の枝を一本かみ切つてしまいました。

「悪い犬だ、こんどきたら、ひどいめにあわせてやろう。」と、勇二は、山吹を見ながらいました。けれど、もはや、こんなになつてしまった山吹は、どうすることもできませんでした。

いつしか、秋となり、冬となりました。冬には、寒い、寒い日がつづいたのでした。地面は凍つて、堅くかちかちとなりました。そして、草の葉や、木の葉は、霜のために傷んでそのころまで残つていたものもあつたけれど、それすら見る影もなかつたのであります。山吹の細い茎も凍つて、しぼんでしまいはしないかと思われました。

しかし、山吹は、この寒氣と戦つて、ついに負けませんでした。やがて、春がめぐつてきたときに、緑色の芽を、哀れな曲がつた枝に萌やしたのであります。去年の春は、あの日蔭にあつたが、今年日はよく当たるので、その葉の色は光沢がありました。

勇二は、山吹のいきいきとした姿を見ると、喜んで、その小さな木の根に肥料を施しました。

日の光が十分に当たり、それに、施した肥料がよくきいたとみえて、山吹は、夏のはじめに、黄金色の花を三つばかりつけました。

「お母さん、山吹が咲きましたよ。」と、勇二は、母に知らせました。

「おお、ほんとうに、三つばかりだけれど、よく、あんなに小さくて花をつけたもんだね。」と、母は、感心していわれました。

まことに、その姿は、いじらしくありました。いじけた木は、それより大きくなりませんでした。そして、また一年はたつたのであります。

翌年の春になると、この小さな山吹の根もとから、新しい芽が地を破つて、頭を伸ばしました。しかも、二本、三本といっしよに、その芽は、気持ちのいいほど、ぐんぐん

と伸びたのであります。

「お母さん、山吹から、あんなに新芽が出ましたよ。」と、勇二は、母に告げました。母は、勇二の告げる前から、それを知っていられたようです。

「ああ、山吹の子供なんだよ。」といわれました。

「お母さん、そんなら、この小さい、いじけたのが親なんですか。」と、勇二は、いまさらのごとく驚いて、山吹に目を向けてたずねました。

「おまえが、もらつてきて植えたのが、親木になつて丹精したから、こんなにいい子供が産まれたんです。」と、母は答えられました。

母のいうことを聞いて、勇二は、感心したのです。同時に、いろいろのことが、頭に浮かんできたのでした。

若芽は、ぐんぐん伸びてゆきました。そして、やがて、季節になつて、いつぱい、枝に、黄金色の花をつけました。けれど、親木は、子供に圧せられて、地面をはつて、泥に葉が汚されて、見る影もなかつたのであります。

「お母さん、この親木はかわいそうですね。」と、勇二はいいました。

「いい子供が産まれて、親木は、それで満足して、枯れていくんですよ。人間も、か

わりはありません。」と、母はははいわれたのです。

勇二ゆうじは、このとき、孝こうちゃんの家いえから、もらつてきた時じ分の山吹やまぶきの姿すがたを思おもひ出だしました。

しかし、いま、新あたしい山吹やまぶきは、昔むかしのことは知しらず、花はながたくさん咲さいて、ちようやはちが集あつまつていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

※表題は底本では、「親木《おやぎ》と若木《わかぎ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

親木と若木

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>